

## 加賀地方に現存する能の舞台の造形

横 山 勉\*

### A study of the formative elements of the existing Noh stage in the Kaga region

Tsutomu Yokoyama

The Noh stage is the place having the intimate relation between the direction and performance, and has the original structural form. This paper aims to discuss the architectural culture of Noh in the Kaga region through the formative elements of the existing Noh stage. In the Kaga region taking a great interest in Noh represented by Kagahosho and Jichushinjino, lots of fine Noh stages remained. The discussion clarified the characteristics of these Noh stages.

#### 1. はじめに

平成13年に能楽が19件の世界無形遺産のひとつとしてユネスコに登録された。文化遺産、自然遺産としての世界遺産が約630件既にユネスコに登録されており<sup>1)</sup>、それら世界遺産に続くもので能楽の存在が改めて認識されることとなった。能は独自の舞台で演じられる伝統的舞台芸術である。本論は能の演出や演技と深い関係を有する演能の場であり、空間の独自の構造形式をもつ舞台について、それらの造形を通して能における建築文化を論及するものである。加賀地方は金沢市の指定文化財である加賀宝生<sup>2)</sup>や大野湊神社の寺中神事能<sup>3)</sup>に代表されるように能の仕舞や謡いが盛んであり、それを象徴する立派な演能の舞台が多く見受けられる。武家の式楽として庇護された能は、初代加賀藩主前田利家の金春流から五代藩主前田綱紀の宝生流へ移るとその後宝生流に統一され、また、前田家藩主を頂点とした武家や細工所の工人がシテ以外の役を習得した伝統に培われ<sup>4)</sup>、庶民にも拡がりを見せ、明治維新時の衰退した一時期を乗り越え、能関係者の努力により隆盛を今日に伝えている。現在、その舞台の多くは神社に付属する形式で遺存し神事能を奉納してきたが、生活環境の変化に伴い、維持管理の難しさに直面している一方、自治体や能関係者による啓蒙活動（県民移動能等）が行われている。今回は加賀地方に現存する能の舞台について実測調査を中心としてその概要を報告するものである。

#### 2. 神社に現存する能の舞台

##### ①大野湊神社

金沢市西部の日本海に近く、田園風景が望める木曳川に沿って社殿はある。神域は「寺中の杜」

---

\* 建設工学科 建築学専攻

といわれるように鬱蒼とした木々に覆われ、原始の様相を保ち、その木々は金沢市の天然記念物<sup>5)</sup>に指定されている。大野湊の守護神、大野庄の総鎮守として古い由緒を有する大野湊神社は、加賀藩主前田利家、利長、利常の厚い庇護のもと社殿が整い、「寺中能」と呼ばれた神事能の振興が行われ、歴代藩主の崇敬により保護を受けた<sup>6)</sup>。能舞台は慶長9年(1604)に利長によって造営され、万治元年(1658)、寛文元年(1661)、寛保元年(1741)等数回の修復<sup>7)</sup>が前田家の援助で、寛文5年(1665)以降は村民の奉加で行われ、地域との関わりを深くした。「加能宝鑑」<sup>8)</sup>をみると、明治30年(1897)の大野湊神社の境内に能舞台はなく、現在の能の舞台は明治40年(1907)<sup>9)</sup>に造営されたものである。「寺中神事能番付表」<sup>10)</sup>によると明治3年(1870)から明治44年(1911)まで能の奉納記録が判然とせず、その期間演能の舞台が存在した確証を見いだせないが、平成13年5月15日には392回目<sup>11)</sup>の能が奉納された。能の舞台は随神門に入って左手にあり、木々の深い神域を挟んで本殿と向かい合うように、本殿、拝殿、参道、鳥居を結ぶ軸線とは僅かに東側にずれ、舞台正面を北に向けて配されている。舞台は随神門、旧拝殿、鳥居と木々に囲われた左右に拡がりをもつ観能空間としての空地に面している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、正面入母屋造、背面切妻造、瓦葺で、高欄をもつ張り出しの脇座がある。橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。舞台と59度の角度をなす橋掛りは楽屋と連絡している。後座は桁行一間、梁間一間、片流、瓦葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は、銅線で釣り下げられた舞台床下の4個、橋掛り床下の1個の素焼き瓶、舞台・橋掛り床回りの羽目板張りとともに音響効果を考慮した造形となっている。鏡板に様式化されたひとつの定型を示すような豪壮な老松、切戸口壁面に竹が描かれている。柱頭組物は舞台の舟肘木のみである。舞台妻飾として木連格子、懸魚、縁形の薄板欄間、隅木小口や高欄に飾り金物、腰長押に釘隠がある。軒は一軒の構成で全体として簡素であるが、風格のある造形となっている。

## ②管生石部神社

加賀市北東部の大聖寺川を前に、敷地山を背にして、神木といわれる巨木が点在する神々しい雰囲気漂う一段高い平地に加賀の二の宮である社殿がある。管生石部神社は江沼郡の総鎮守として地域の信仰を集め、加賀、大聖寺藩主の崇敬が深く、本殿幣殿拝殿等造営され、調度も多く寄進された<sup>12)</sup>。この社殿の能の舞台は、舞殿とも記述され、演能記録として戦前期の写真(神社蔵)が残されており、昭和59年から平成5年まで新能が奉納されている。第2回加賀市新能で宝生流宗家が舞うなど錦城能楽会を中心として能の芸能の盛んな風土である。現存の舞殿は天保2年(1831)の造営といわれている<sup>13)</sup>が確証はない。「加能宝鑑」<sup>14)</sup>の管生石部神社の俯瞰図(明治31年刻)をみると、舞台は現在より多少南側に位置しているが、建築形態はほぼ同じであり、神社財産社殿及工作物登録変更申請(神社蔵)に明治42年(1909)登録の舞殿に関する記録がある。管生石部神社略記<sup>15)</sup>に現在の舞台とほぼ同じ建築形態の写真が載せられている。また、昭和6年(1931)落成の舞殿の図面(神社蔵)が残されており、現存する能の舞台の図面であることは明らかである。能の舞台は神門に入って右手にあり、その正面は本殿、拝殿、参道、神門を結ぶ軸線と矩折れに西側を向いて配されている。舞台は神門、拝殿、社務所、鬱蒼とした木々に囲まれた境内の中央部を観能空間とした空地に面している。橋掛りは一段高い拝殿敷地より舞台床に向かって斜めに仮設で構築する。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺、脇座はなく濡れ縁に高欄が廻っている。後

座は桁行一間、梁間一間、一重、片流、銅板葺である。舞台は格天井で格式のある構成をなし、後座は片流の化粧屋根裏天井で音響効果と簡素な造形を示している。舞台床は比較的高いが、音響効果のための瓶はない。舞台廻りに高欄が配されていることも造形を優雅にしている要因のひとつである。鏡板は縦寸法が短く、そのことが描かれている老松の表現に影響を与えていると考えられる。老松の幹が曲がり延びる様式ではなく、松葉も数多く描かれ、定型<sup>16)</sup>より自由な構成となっている。切戸口壁面には竹が描かれているが、壁面積が小さく、絵画が窮屈な感が否めない。柱頭組物は三ッ斗組で構成され、舞台妻飾として木連格子、懸魚があり、隅木小口や高欄に飾り金物、木鼻や墓股に曇線形が施されている。二軒で屋根の軒が深く、肅然とした風姿のなかに、所々に優雅さのある造形となっている。

### ③小松天満宮

小松市北部の梯川に沿いの森に社殿はある。小松城の北東(鬼門)の敷地である。本殿、石の間、幣殿、拝殿を連ねた権現造の社殿、神門、鳥居、能の舞台等が梯川に沿って点在し、前田利常をはじめ歴代の前田家の崇敬厚く、能美郡の総社として庇護された。現存する能の舞台は建立年代は明確ではないが明治29年(1896)に、金沢の波吉家の舞台を今様能狂言の泉祐三郎一座の所有を経て小松天満宮へ移築したものである<sup>17)</sup>。「加能宝鑑」をみると、舞台は本殿、石の間、幣殿、拝殿の軸線と矩折れに配されている。本殿に向かって左手に存する現在の配置は明治31年(1898)以降で昭和9年(1934)の県知事の移転許可書(神社蔵)によりその頃に現在地へ移ったと考えられる。舞台は幾度と矩折れに続く参道の点景のひとつとなっている。舞台正面は東向きで、本殿、宝物館、堤等に囲まれた観能空間の空地に面している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、正面入母屋造、背面切妻造、瓦葺で、高欄をもつ脇座が張り出している。橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。舞台と74度の角度をなす橋掛りは楽屋と連絡している。後座は桁行一間、梁間一間、片流、瓦葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は、音響効果とともに天井勾配の向きの違いによる不連続を天井部材の統一表現によって舞台を一体空間として演出している。鏡板に様式化された豪壮な老松、切戸口壁面に竹が描かれている。柱頭組物は舞台の舟肘木のみで橋掛りにはない。舞台妻飾として木連格子、懸魚があり、一軒の構成で、全体として簡素であるが、石積みの基壇上に造営され、堂々とした造形となっている。

### ④金劔宮

手取川に沿って細長く広がる鶴来町の東部の険しい山並を目指して長い石段を登り詰めると深い木々の中に南北に広がる平地に白山本宮四社のひとつである金劔宮の社殿が点在する。源、足利、前田等の多くの武将の帰依を受けた歴史を社宝に伝えている。能の舞台は舞殿または絵馬殿とも呼ばれ、舞台正面は本殿、幣殿、拝殿の軸線とは矩折れに南向きで、周囲を木々や建築群に囲まれた観能空間としての空地に面している。舞台の建立年代は明確ではなく、昭和27年(1952)に改築が行われた<sup>18)</sup>。改築時、新たに玉井敬泉(1889~1960)<sup>19)</sup>によって、様式化された定型の老松とは異なった、若々しい生命感溢れる筆致で枝葉の横拡がり強調された老松が鏡板に描かれている。切戸口壁面に竹は描かれていない。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、銅板葺である。橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。舞台と41度の角度をなす橋掛りは楽屋と連絡している。平成7年の県民移動能の記録写真をみると、脇座の張り出しはないが、舞台の一部が

脇座として機能していることがわかる。後座は桁一間、梁間一間で、天井は折上天井の舞台と連続し、舞台と一体空間となっている。舞台の天井は正面中央部を格天井、その左右を片流れの化粧屋根裏天井とし、絵馬殿兼用の能の舞台として破綻をきたさないように造形されている。舞台の柱頭組物は舟肘木で橋掛りにはない。舞台妻飾として懸魚、墓股があり、一軒の構成で、基壇上に低い床をもつ舞台は厳格で静粛な風姿を有する造形となっている。

### 3. 金沢能楽会による能の舞台

#### ⑤石川県立能楽堂

金沢市中心の兼六園に近く、美術館、歴史博物館等が集まる石引の地に能楽堂は位置している。明治維新以降、有力大名の援助を受けられなくなった能楽は「加賀宝生」も例外では無く、困難な時代を向かえた。そのような時代の流れの中で、現在の石川県立能楽堂の舞台は、石川県能楽会を引き継いだ明治34年(1901)設立の金沢能楽会による演能の拠点とするため、明治33年(1900)完成の佐野舞台の建材の腐朽による改築の必要性から昭和7年(1932)広坂通りに新築された金沢能楽堂を移築したものである<sup>20)</sup>。その屋内の能の舞台は、屋外の観能空間や演能環境は異なるが、「加賀宝生」を伝承、演能する舞台として、武家の式楽を表現するに相応しい簡素な全体構成の中に豪壮な造形を随所に表出したものとなっている。本舞台周囲の観能空間に約500席が据えられ、舞台を矩折れに取り囲む。屋外に設えられた能の舞台は自然環境における経年変化を建築に刻み修復を必要とすることが多いが、能楽堂内の舞台は覆屋によって早い老朽化を免れ当時の舞台の様相をほぼそのままに伝えている。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、檜皮葺で、高欄をもつ張り出しの脇座がある。橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、檜皮葺である。舞台と66度の角度をなす橋掛りは鏡の間、楽屋と連絡している。後座は桁行一間、梁間一間、片流、檜皮葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は、舞台床下の9個、橋掛り床下の2個の瓶、舞台・橋掛り床回りの羽目板張りとともに音響効果を考慮した造形となっている。玉井敬泉(1889~1960)によって、様式化された図案を基本としながら、鏡板に崇高な老松、切戸口壁面に竹が描かれている。舞台の主要部材は台湾檜である。舞台の柱頭組物は三ッ斗、曇肘木の構成で橋掛りは大斗、曇肘木である。化粧棟木下に透墓股が設えられている。舞台妻飾として木連格子、懸魚があり、水引梁上に一間に曇肘木を有し連子を施した墓股が2個据えられている。隅木小口や高欄に飾り金物や釘隠はない。二軒の構成で、全体として厳然とした端正な造形を示している。

### 4. 数寄者による能の舞台

#### ⑥石屋旅館

金沢市北部の山間に位置する深谷町に旅館はあり、近世に藩を挙げて開発に取り組んだ温泉の地である。旅館の玄関を入り東方奥へ階段を数力所登りながら進むと室内能の舞台をもつ大広間へ出る。その大広間は東側に屋外の能の舞台を見下ろす見所となっている。深い木々を借景として見所と相対している能の舞台は日本文化に造詣の深い六代目石屋二左衛門<sup>21)</sup>による大正6年(1917)の建立である。舞台正面は西を向き、2階建見所との距離は約7.4m、2階床より舞台床は1.2m低い位置にあり、独特な観能空間を形成している。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、正面入母屋造、背

面切妻造、瓦・銅板葺で、舞台と59度の角度をなす橋掛りは書院座敷を有する楽屋に連絡している。橋掛りは桁行二間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。高欄をもつ庇造、片流、銅板葺の脇座がある。後座は桁行一間、梁間一間、片流、瓦葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は、舞台床下の土に埋め込まれた3個、後座床下の2個の素焼き瓶、舞台床回りの羽目板張りとともに音響効果を考慮した造形となっている。橋掛りの床下には瓶はなく、羽目板も施されていない。鏡板に広谷水石(1884~1944)<sup>22)</sup>によって、七五三の松葉の様式化された図案であるが、典雅な作風の老松が描かれている。水引梁上に斜材と擬宝珠を組み合わせた装飾が調律を奏するように施され、欄間外部には障子建具を入れることができる。舞台妻飾として懸魚、木連格子があり、一軒の構成で、舞台床が低く構築され、軒先銅板屋根の軽やかな風姿、構成部材の瀟洒な様相により優美さを漂わせた造形となっている。

## 5. 神社拝殿として移築の能の舞台

### ⑦八幡神社

金沢市西部の大野湊神社近く、普正寺町の西端に社殿はある。拝殿は明治5年(1872)に大野湊神社の能の舞台を移築したもので檜造りである。屋根の葺き替え前は梅鉢の紋入り軒丸瓦が施され、前田家との関わり的一端を示している。以前の本舞台と後座が拝殿(一部幣殿)となり、後座にあたる壁面に、九栄(生年不詳~1800)・洞栄による躍動感溢れる老松、竹の描かれた鏡板が分割されて取り付けられている。その鏡板の下端が床下まで伸びており、本来の鏡板の様子を知ることができる。東南の柱には橋掛りの高欄と考えられる痕跡が見受けられ、能の舞台の平面構成と一致する。床下に伸びる鏡板の下端や高欄痕跡より現在の床は能の舞台より高い位置にあり、社殿への転用として移築した結果と考えられる。拝殿の本舞台部は桁行二間、梁間三間、一重、正面唐破風付入母屋造、背面切妻造、瓦葺である。後座部は桁行一間、梁間一間、一重、片流、瓦葺である。舞台妻飾として木連格子、懸魚があり、柱頭組物は舟肘木で、一軒の簡素な造形である。舞台主柱の礎石に加賀藩用の石として使用制限が課せられた金沢の戸室石が使用されており、格式の高さの一端が伺える。

### ⑧中村神社

金沢市中心に近い犀川南側の住宅地域である中村町にこの神社は位置している。金沢城二の丸能舞台を明治3年(1870)に紹魂社の拝殿として卯辰山に移し、その後、昭和10年(1935)以降放置されていたものを昭和40年(1965)に中村神社が拝殿として移築した<sup>23)</sup>と伝えられている。金沢城二の丸絵図(19世紀)をみると2ヶ所に舞台があり、ひとつは周囲の書院に組み込まれるように配され、他方は表書院大広間と対面する構成で中庭に独立した舞台である。そのいずれかが移築されたと考えられる。拝殿の本舞台部は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、瓦葺である。鏡板はないが、柱頭組物に三斗実肘木、各頭貫中央に梅鉢紋の彫り込まれた板墓股、その左右に嵌め込まれた龍と雲の丸彫、折上格天井の格間に再現された極彩色の図案等華麗さを有し、二軒の豪壮な造形となっている。拝殿は改変されたものと考えられるが、金沢城二の丸における見所としての表書院の華やかさに相応しい能舞台の格式を彷彿とさせる造形を有している。

## 6. 舞台寸法による検討

### 舞台の間口と奥行

図一1をみると、小松天満宮と金劔宮を除いて他の本舞台はほぼ正方形に近い平面である。小松天満宮の本舞台の間口は奥行より1,5尺広い。金劔宮の本舞台の間口は舞台の奥行に後座のそれを加えたものとほぼ同じである。正方形に近い平面をもつ舞台は石屋旅館、大野湊神社と管生石部神社、石川県立能楽堂、八幡神社、中村神社の2グループに分けることができ、それぞれのグループの柱間は15,0尺、18,0尺~19,6尺である。武家の式楽としての能の舞台の頂点を示す万延元年(1860)の江戸城本丸表書院の本舞台<sup>24)</sup>は方三間(19,5尺)、後座奥行一間半、脇座の幅半間、水引梁内法は10,5尺、床高は2,64尺、主柱は0,9尺、橋掛り長は52,5尺、橋掛り幅は7,35尺、橋掛り角度は約50度である。それ以前の舞台の様子をみると、文禄2年(1593)の秀吉による禁中の紫宸殿前に構築された本舞台<sup>25)</sup>は方16尺で、水引梁内法は7,5尺、後座奥行は9尺、橋掛り幅は5,5尺である。舞台の柱間において、八幡神社、中村神社は江戸城本丸表書院とほぼ同じ、大野湊神社、管生石部神社、石川県立能楽堂は近い寸法である。石屋旅館は紫宸殿前に設えられた舞台と近い寸法を示している。必ずしも全ての能の舞台が江戸城本丸表書院の本舞台の規模に沿うものばかりではなく、能の舞台が建立された場と深い関わりをもち、石屋旅館のそれは総体的に小さく、数寄者の6代目による造形が、観能空間を含め、演能の場に相応しい空間を演出している。

### 舞台後座奥行と脇座の幅

図二2をみると、後座の奥行は9,0尺~8,8尺の4ヶ所が最も多く、8,5尺、7,5尺、6,7尺と続く。石屋旅館の本舞台は最も小さい間口であるが後座奥行は比較的大きく、舞台の奥行の深さを強調したものとなっている。図一3をみると、脇座の幅は石川県立能楽堂を除いてほぼ3,1尺~3,0尺である。後座奥行9尺前後、脇座の幅3尺前後に定型のひとつが存在することが伺える。

### 舞台の間口内法と水引梁内法

図一4の縦横比をみると、水引梁内法については7,7尺~9,6尺の間で石屋旅館が最も低く、石川県立能楽堂が最も高い。全ての水引梁内法において江戸城本丸表書院舞台より低い。最も横長開口である金劔宮より小松天満宮、大野湊神社、石川県立能楽堂、石屋旅館へと縦横比がそれぞれ2,49、2,24、2,08、1,90、1,88と小さくなる。江戸城本丸表書院舞台は1,77である。加賀地方に現存する舞台の水引梁内法開口は江戸城本丸表書院舞台と比して横拡がりの形態であると同える。

### 橋掛りの幅、全長と角度

表一1をみると、金劔宮における橋掛り角度の41度、幅の5,1尺を考慮すると橋掛り上での演能において困難を伴うことが推察され、事実平成7年開催の県民移動能においては橋掛り上での演能はなされなかった。他の橋掛りの角度は天正9年(1581)の造営とされる現存最古の西本願寺奥能舞台(橋掛り角度60度)<sup>26)</sup>とほぼ同じ乃至は緩いものとなっている。橋掛りの幅は金劔宮以外西本願寺奥能舞台(橋掛り幅5,90尺)とほぼ同じかそれより広く、江戸城本丸表書院舞台より狭くなっている。橋掛り全長は江戸城本丸表書院舞台の半分或いは三分の一であり、西本願寺奥能舞台(橋掛り全長38,93尺)より短くなっている。敷地面積による制約のため全長が短くなると同時に、橋掛り上の演能における変化と工夫の進展が考えられる。

## 7. まとめ

江戸城本丸表書院の能舞台の規範に沿いながら、それよりも大規模な舞台はなく、造形表現において全体として簡素ではあるが、藝股や欄間に創意に富んだ造作も見受けられ、堂々とした厳格な表現から瀟洒なものまで多様な造形を加賀地方の現存する能の舞台にみることができる。

謝辞 調査に際して、河崎正幸氏(大野湊神社)、野根茂治氏(管生石部神社)、北畠能房氏(小松天満宮)、内藤芳治氏(金劔宮)、宮川喜夫氏(石川県立能楽堂)、石屋寛治氏(石屋旅館)、高畠芳秋氏(八幡神社)、多田晃郎氏(中村神社)、福田弘光氏(金沢市史専門委員)に多大な協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

表一 1 能の舞台主要寸法

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
舞台間口	18,1	18,0	18,2	23,1	18,9	15,0	19,6	19,4
舞台奥行	18,0	18,0	16,6	15,6	18,8	15,0	19,5	19,4
後座奥行	8,8	9,0	9,0	7,5	8,9	8,5	6,7	
脇座の幅	3,1		3,0		4,1	3,0		
舞台床高	2,7	3,3	2,3	1,0	2,7	1,8	2,6	2,2
水引梁高	8,3		7,8	9,0	9,6	7,7		
舞台柱太	0,76	0,69	0,69	0,73	0,70	0,50	0,80	0,76
橋掛け幅	6,6		6,0	5,1	7,0	6,0		
橋掛け長	27,0		18,6	17,8	29,0	18,0		

(単位：尺)

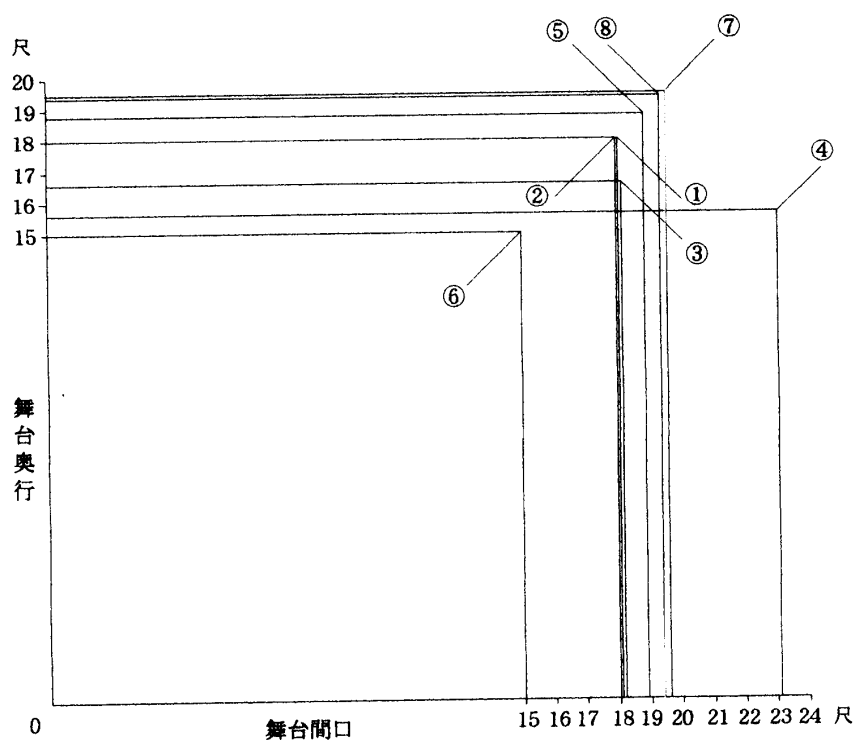


図-1 舞台間口と奥行

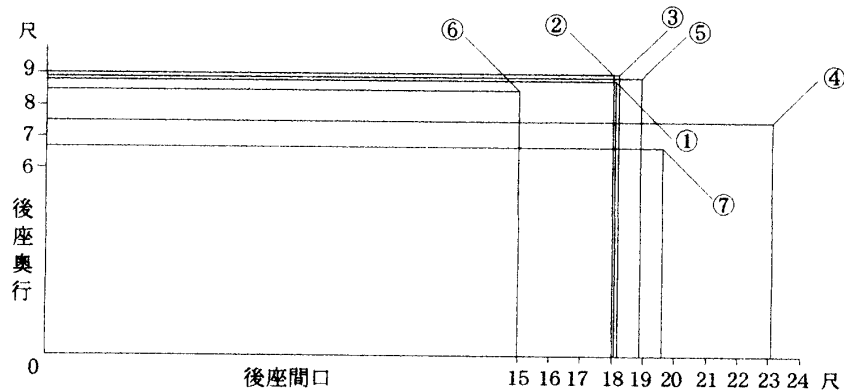


図-2 後座間口と奥行

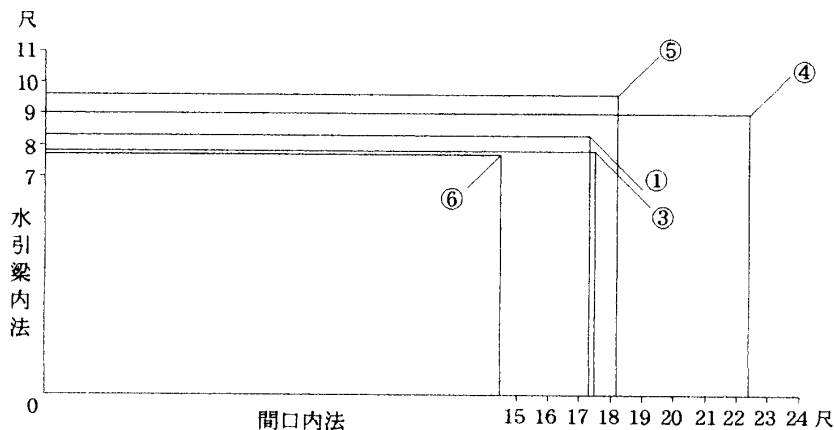


図-4 舞台間口内法と水引梁内法

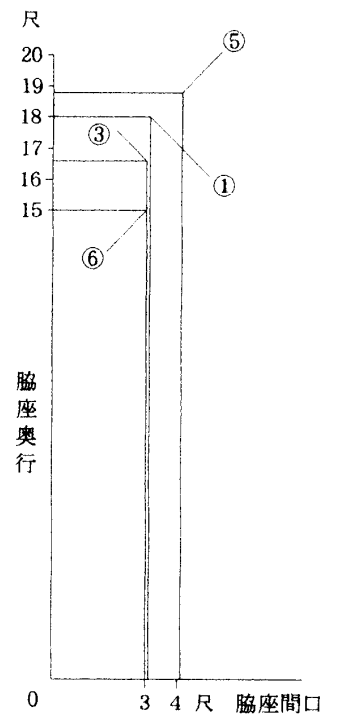


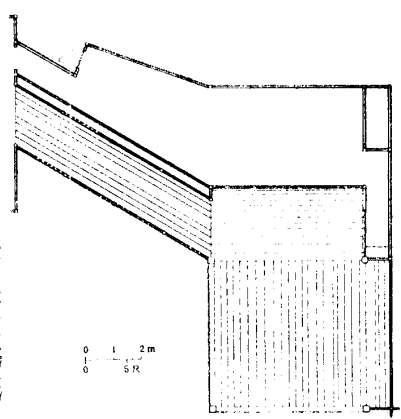
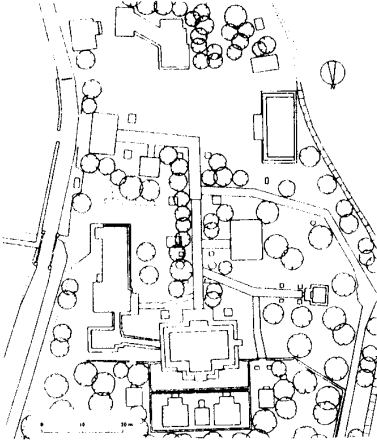
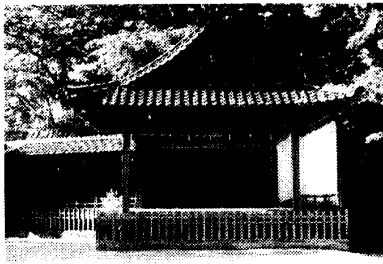
図-3 脇座間口と奥行

# 註

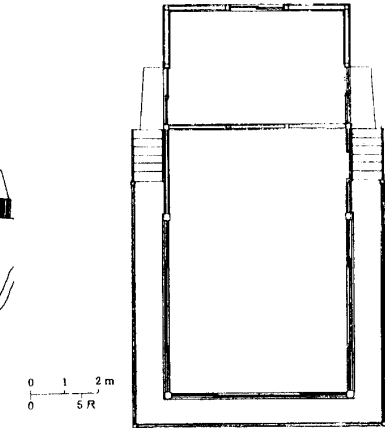
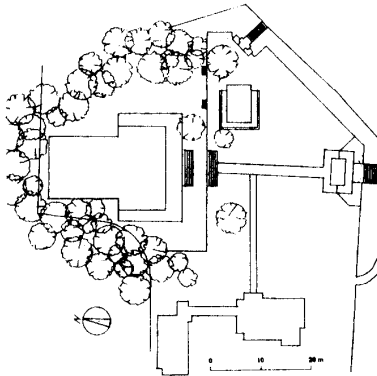
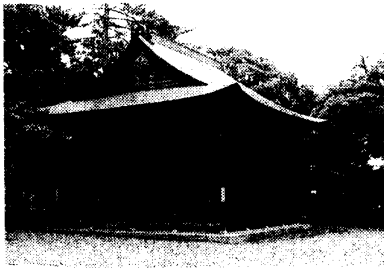
- 1) 羽田昶「文化財」第一法規出版 2001 p10
- 2) 金沢市教育委員会「金沢市の指定文化財」 1999 p50
- 3) 金沢市立図書館「大野湊神社文書目録」1987 p76~77
- 4) 石川県立歴史博物館「能楽ー加賀宝生の世界」 2001
- 5) 2)に同じ p67
- 6) 谷川健一「日本の神々」白水社 1985 p189~194
- 7) 福田弘光「大徳郷土史」大徳公民館 1970 p890
- 8) 泰山哲之「加能宝鑑」歴史図書社 1973
- 9) 大野湊神社沓千参百年祭実行委員会「大野湊神社沓千参百年祭記念誌」2001 p193
- 10) 3)に同じ p78~87
- 11) 大野湊神社御神事能奉賛会「御神事能番組」2001
- 12) 式内社研究会「式内社調査報告」皇學館大学出版 1985 p24~27
- 13) 牧野隆信「大聖寺藩と能楽」1984
- 14) 8)に同じ p1
- 15) 管生石部神社社務所「管生石部神社略記」1926
- 16) 山崎楽堂「能舞台」(野上豊一郎編「能楽全書」第4巻 東京創元社 1979 p17~19
- 17) 梶井幸代・密田良二「金沢の能楽」北国出版社 1972 p256
- 18) 金劔宮社務所「金劔宮」
- 19) 金沢市教育委員会「新加能画人集成」1990 p175
- 20) 17)に同じ p288~289
- 21) 石屋旅館「石屋ばなし」
- 22) 19)に同じ p168
- 23) 金沢市史編さん委員会「金沢市史資料編 17 建築・建設」1998 p34
- 24) 16)に同じ p12~22
- 25) 小松芳正「能舞台變遷概史」(野上豊一郎編「能楽全書」第4巻 東京創元社 1979 p32
- 26) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942



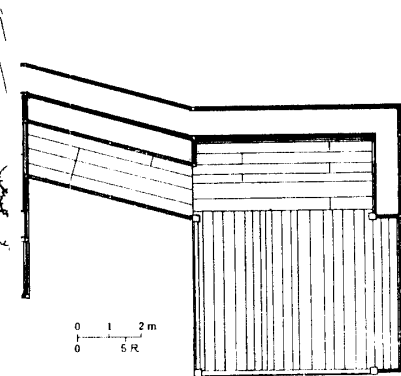
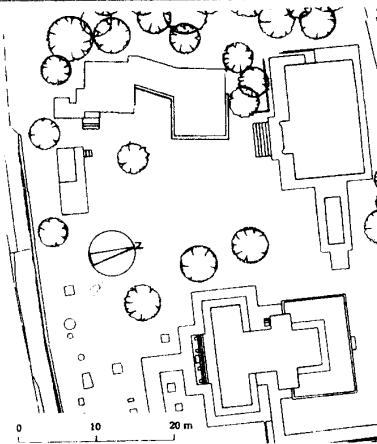
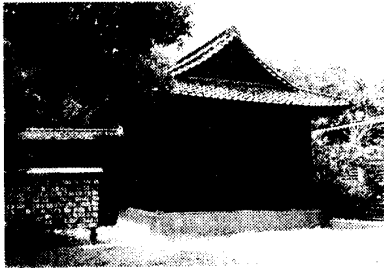
①大野湊神社（金沢市寺中町）



②管生石部神社（加賀市大聖寺敷地）



③小松天満宮（小松市天神町）



④金劔宮（鶴来町日詰町）

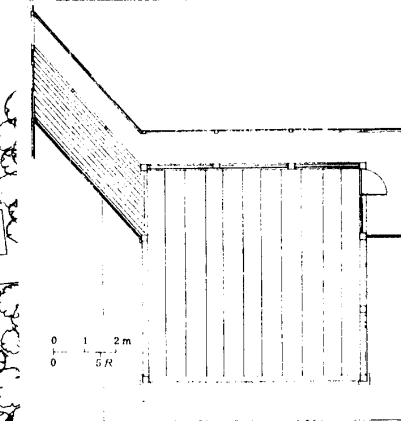
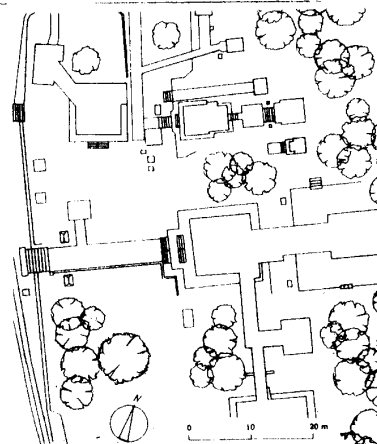
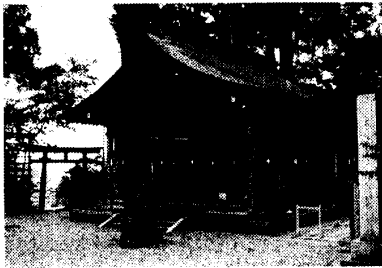
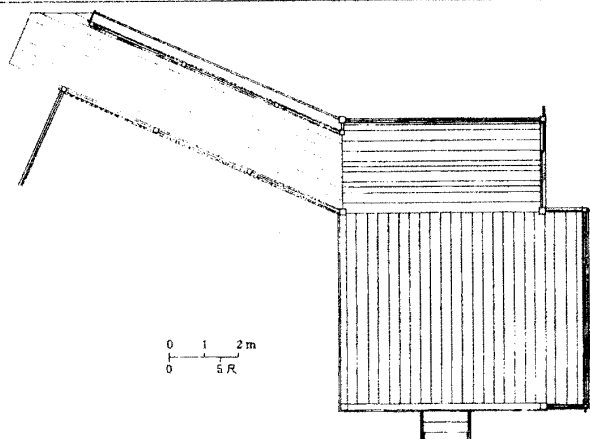
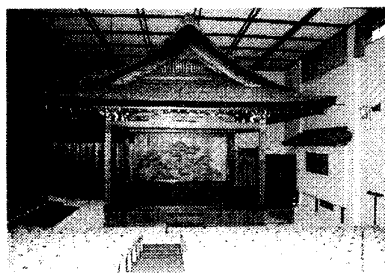
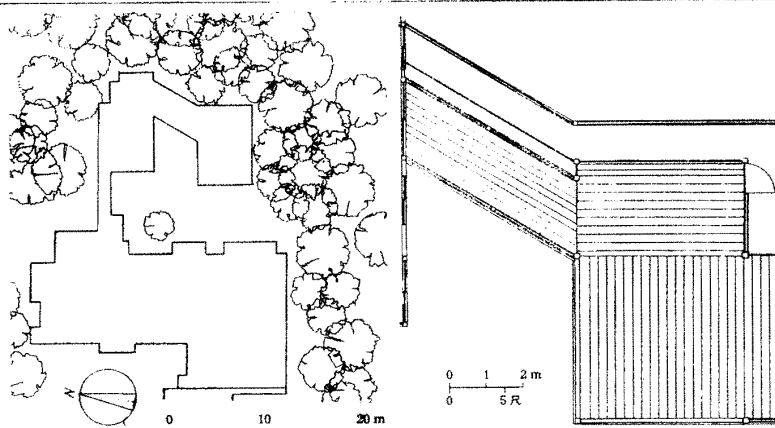
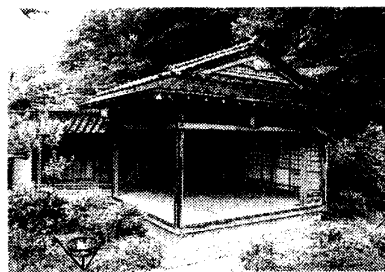


図-5 能の舞台配置図・平面図（1）

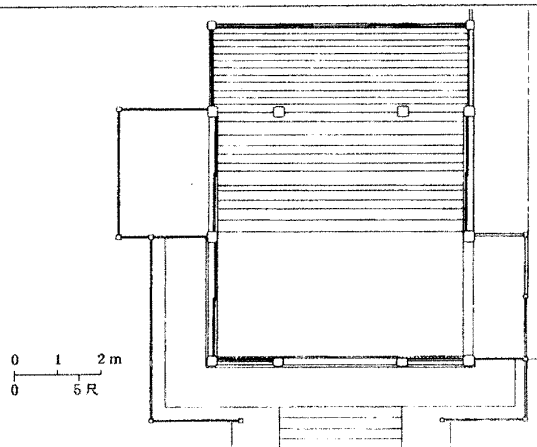
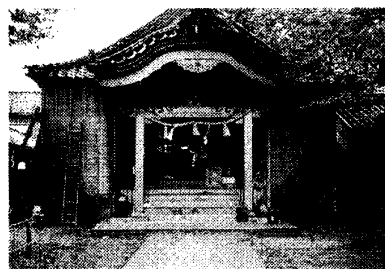
⑤石川県立能楽堂（金沢市石引）



⑥石屋旅館（金沢市深谷町）



⑦八幡神社（金沢市普正寺町）



⑧中村神社（金沢市中村町）

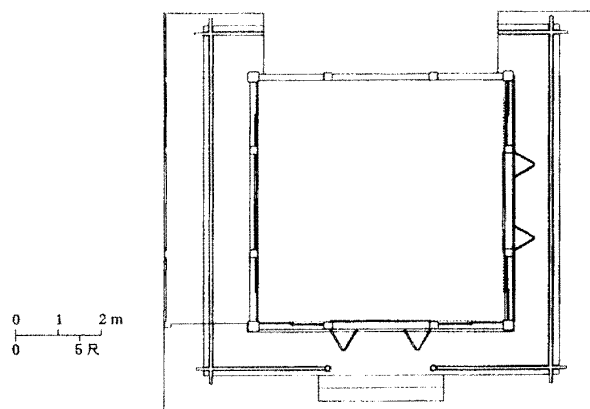


図-6 能の舞台配置図・平面図（2）

（平成13年12月6日受理）